

プレヴェールの 『家族の思い出、あるいは看守天使』をめぐって

吉 田 正 明

キーワード：プレヴェール，風刺，パロディー，言葉遊び

序

プレイヤッド版『プレヴェール全集』の共編者である Danièle Gasiglia-Laster は、その序でプレヴェールが20世紀フランスの最も人気のある詩人でありながらその実相がまだ十分に理解されていないのではなかろうかと疑問を投げかけて、プレヴェール作品の持つ広がりはまだ正確には測定しきれていない現状を指摘している¹⁾。その理由の一つは、プレヴェールといえどもっぱら『天井桟敷の人々』、『言葉』、あるいは「枯葉」など、彼の最大の成功作に結び付けて語られることが多く、ある意味で限定されたプレヴェール像が定着してしまっているからであろう。『言葉』にしても、よく引用されるのは「バルバラ」や「朝の食事」などその最も有名ないくつかの詩であることが多く、そのすべての作品が詳細に分析されているわけではない。この詩集に収められているテキストは、1930年から45年の初版発行までにいくつかの雑誌にすでに発表されたものも多く、ベルトレが苦勞して収集して出版に漕ぎ付けたものであることはよく知られている。しかし注意しなければならないのは、『言葉』はプレヴェール詩の集大成ではなく、あくまで1945年時点での彼のテキストの選集でしかないということである。それ以後も彼は作品を発表し続けるわけで、詩集の他にも童話や物語やシナリオやシャンソン、あるいは紙のコラージュなどその創作活動は多岐に渡る。また、初期の彼の創作活動についても、まだ十分その実態が解明されているわけではない。例えば10月グループにおける対話や朗唱風の台詞の創作、映画のシナリオや台詞など、まだ十分に明かにされていない側面が確かに残されている。そうした創作活動にスポットがあまり当てられていないことをプレイヤッド版の編者は指摘しているのであろう。

本稿では、比較的短い作品が多い『言葉』にあって、「戦闘拒否」*La Crosse en l'air* に次いで長いテキストである『家族の思い出、あるいは看守天使』を取り上げて、その作品分析を行いたい。これは『言葉』の中で最も初期に発表されたテキストであり、その作品分析をとおしてプレヴェールの初期作品における特質の一端を明らかにし、多少なりとも新たなプレヴェール像が示せればと思っている。

最初にこの作品の発表の経緯を簡単に辿り、物語の梗概を述べた後、主に風刺という観点から作品分析を試みたい。最後にプレヴェールの自在な言葉遊びの諸相を分析し、滑稽さの源に言葉に対する不断の問い直しが存することを明らかにしていきたい。

発表の経緯

『家族の思い出、あるいは看守天使』*Souvenirs de Famille ou l'Ange Garde-Chiourme* (以下『家族の思い出』と表記。)と題されたこのテキストは²⁾、1930年12月にジョルジュ・リブモンデーセーニュが編集長をつとめていた雑誌『ビフュール』*Bifur*の第7号にはじめて発表されたものである。プレヴェールの初期作品の発表をめぐるのは、『コメルス』*Commerce*の編集長をしていたジャン・ポーランをはじめ、数名の雑誌編者たちが競ってその先行性と功績を主張していたが、後にモーリス・サイエがプレヴェールに書簡で確かめたところ、リブモンデーセーニュの依頼により執筆されたものであることを詩人自身が明かにしている³⁾。この『ビフュール』というのは、ジェームズ・ジョイスも外国人顧問の一人として関与していた雑誌であるが、編集長のリブモンデーセーニュによれば、鉄道の転轍ないし分岐点 *bifurcation* から着想を得て、後にアンガジュマン(社会参加)という言葉で表現されることになる一つの新しい傾向と方向性を示そうとして命名したものであるという⁴⁾。このときの『ビフュール』第7号には、プレヴェールの他、ポール・ニザンやエイゼンシュタインもその名を連ねている。末尾には、「30歳。作者によると、意地の悪いフランス人のために下手くそなフランス語で書かれたもの」とごく簡単な解説が付されている⁵⁾。

その後この作品は1946年に、マリオ・ブラシノスの挿絵付きでエディシオン・フォンテーヌから小冊子としても出版されることになる。またこのテキストが『言葉』に収録されるのは1945年の初版ではなく、1947年の増補決定版においてであった。いずれにせよ、これは『言葉』に収められたプレヴェールの作品中、最も初期に書かれたものである。

ところで、1980年に「フランス自筆原稿協会」により買い取られた本テキストの自筆原稿は、1から12までの数字が記された黒インクで書かれた12枚の紙葉からなり、プレヴェール自身が描いた動物の顔をした翼のある人物のイラストが添えられている。ここに、後にプレヴェールが創作することになる紙のコラージュの萌芽を見ることができようし、当然のことながら題名にある「看守天使」*L'Ange Garde-Chiourme*のイメージをそこに見ることも可能である。皮肉とパロディに満ちたこの風刺的で滑稽な作品は何を語ろうとしたものであろうか。作品分析に入る前に、簡単に物語の梗概を見ておくことにしよう。

物語の梗概

この物語はある父子家庭の長男により一人称単数で語られたものである。話は第一次世界大戦前のカマルグ地方の町 *Saintes-Maries-de-la-Mer* を舞台に展開する。風変りな寡夫の父親とその息子たち、そして亡くなった母親の代わりに食事の世話をする年老いた女中と、そこで子供たちの教育係をつとめる一人の司祭が主要な登場人物である。包帯製造を生業として住み着いた父親はまた偉大な学者でもあり、完璧な義足の発明を夢見ている。台所は彼の実験室も兼ねており、実験器具やゴキブリなどの虫がそこには散乱し蠢いている。上の空で料理する老女中はときおり調理器具と実験器具とを取り違えてしまったりする。こうして父親との不潔な食事や司祭の退屈な旧態依然とした宗教教育などで単調な日々が過ぎ去って

いく。ある日父親は梅毒によるバラ疹を発症し、どもったりひとりごとを言ったりするようになり、精神の変調をきたし始める。子供たちは司祭から繰り返し聞かされる聖書話を自分勝手に解釈し、皮肉たっぷりに改作しているのを司祭に盗み聞きされてしまう。諍いが生じ、司祭は父親から教育係を解任され家から追放される。その父も子供たちを見捨てて家出してしまい、女中も姿を消す。兄弟の一人が破傷風で亡くなる。語り手は長男として弟たちの面倒を見なければならなくなり、責任の重さに打ちひしがれる。町で催される牛のレースが気晴らしを与えてくれ、そこで一人の少女との出会いが語られる。彼女は語り手の興味を引き、話を聞きたいと思った唯一の人物である。彼女は Aigues-Mortes の動物の解体業者の娘であることが分かるが、その町は遠く離れているうえにその町の名前が恐怖心を起こさせ彼女に会いに行くことができない。自由ではあるが退屈な毎日が過ぎ去っていく。来訪者を期待して飼っていたロバを見張りに立たせていると、スポーツウェアにソンブレロを被った父親が帰ってくる姿が目撃される。数々の冒険のあとで空腹をうったえる父親に、姿を消していたはずの老女中も姿を現し、以前のように食事の準備を整える。こうして再び父親と一緒に食事を共にすることとなった子供たちは、父親から支離滅裂な冒険譚を聞かされる。話し終えると、憔悴しきった父親はテーブルの上から転倒して死んでしまう。そこへ司祭が舞い戻ってきて、祖国を侵略した敵に対する復讐心に満ちた扇動的な演説をしたのち、亡くなった父親を蘇らそうとする。しかしそれが不可能と分かると臨終の祈りを唱える。そこに一人の女性が淫らな姿で現れ司祭を誘う。そのとき戦争が勃発する。二人の羊飼いが戦争に行くことを拒否してお互いのどを切って自害するであろうことが語られる。二人の遺体は教会にも凱旋門の下にも葬られることはないであろう。

自伝的要素

1 人称単数の “je” で語られたこの作品にはプレヴェールの自伝的要素がある程度盛り込まれているのではないかと思われようが、実際はほとんどが虚構の物語である。プレヴェールが自らの幼少時代を回想している『幼年期』*Enfance*⁶⁾とこの作品とを比較してみると、そこには自伝的要素がほとんど見られないことが分かる。『家族の思い出』の語り手は確かにプレヴェールと同様、既成の道徳や価値観や宗教に対して反抗心を顕わにしている。しかし、『幼年期』で語られているような幸福な家庭の様子をそこに見出すことはできない。ただこの虚構の家族の物語の中にもプレヴェールの自伝的要素がまったく欠如しているわけではない。例えば、プレヴェールの兄のジャンは1915年に腸チフスのために17歳で夭折しているが、この作品でも兄弟の一人が破傷風で命を落とすことになる。父の家出の話も伝記的事実と符合する。『幼年期』で語られているように、父アンドレは勤めていた保険会社を辞めた後、家族をバリに残してしばらくの間南仏の方へと旅立ってしまうが、この物語でも父は子供たちを置き去りにして出奔してしまう。ところで『幼年期』の父アンドレは南仏から家族へ絵葉書を数枚送っているが、その中の一枚は Saintes-Maries-de-la-Mer から差し出されたものである⁷⁾。アルノー・ラスターも指摘しているように⁸⁾、この絵葉書の思い出が作品の舞台をカマルグ地方のこの町に設定することをプレヴェールに着想させたのかもしれない。また、語り手のインディアン小説への好み、とりわけ白人に対して激しく抵抗し続けた

スー族の酋長シッティング・ブル Sitting Bull への共感も共通するところである⁹⁾。『幼年期』の中でプレヴェールはシッティング・ブルが好きな理由を、「インディアンはボーア人のように、あるいは『アンクル・トムの小屋』の黒人たちのように、自分たちの正当な権利を守ろうとしている」¹⁰⁾からであると述べている。インディアンであれ、黒人であれ、子どもであれ、文明や権力や権威、あるいは既成の道徳の名のもとに抑圧されたり自由を奪われたりした人々たちへの同情、共感、プレヴェールに一貫して認められる感情である。

さらに付言すると、『家族の思い出』の中では他界しているためほとんど話題に上ることのない母親についても、そのわずかな言及の中にも自伝的要素を窺うことができる。物語の中で食事の最後に酩酊した父が息子たちに亡くなった妻のことを想起する場面がある。そこではこのように語られている。「少しずつ酔った声になり、父は僕の哀れな母のことを話し出した。見知らぬ人までもが涙するほどまだ若く美しいときに亡くなってしまった母のことを。」¹¹⁾

『幼年期』ではプレヴェールの母は「絵に描かれた王女」のようであり、「女優よりも生気に溢れて」おり、「人生の星」であって、「街路や市場、その他どこでも人から美しいと言われると、少し困惑して顔をばら色に染め、それから吹き出して大笑いをする」美しく魅力的な女性として描かれている¹²⁾。

このように『家族の思い出』の中に断片的にプレヴェールの自伝的要素を垣間見ることができるが、この作品はほとんどが虚構の物語であることは前述したとおりである。プレヴェールは、親友のマルセル・デュアメルが自伝を書いたときに、「おまえの人生について語るな」というタイトルを提案したとされているが¹³⁾、もしそれが本当ならプレヴェールはこの作品において自らの信念を貫いたと言えよう。作者の意図は、むしろ虚構の父子家庭の生活情景を通してブルジョワジーの既成の価値観や道徳を徹底的に風刺することにあつたのではなかろうか。ここでは父親であれ、司祭であれ、権威主義をかざして子供たちを抑圧し、自由を束縛する者すべてが攻撃的となる。

プレヴェールにあっては子供たちはしばしば、権威主義的な大人たちから本性の発露や自由を抑圧される犠牲者として描かれている。最も典型的な例は、学校の威圧的で詰め込み主義的な教師とその犠牲者たる生徒たちであろう。教師から質問責めにあう「劣等生」*Le Cancre*¹⁴⁾や、執拗に足し算を暗記させられる「練習帳」*Page d'écriture*¹⁵⁾の生徒たちを想起しよう。『家族の思い出』においても、子供たちは大人たちから抑圧される存在として描かれていると言えよう。この物語では語り手とその兄弟たち、そしてエーグ・モルトの動物解体屋の娘エチエネットのみが風刺の対象からはずれている。語り手の辛辣な風刺は、人間の自由と本性を抑圧し既成の価値観を押し付けようとするすべての権威主義に対する子供側からの反逆の一手段ではなかろうか。以下、この物語の主要な登場人物たちを取り上げ、彼らに対する風刺やパロディーがどのような手段でおこなわれているのかをみてみることにしよう。

風刺の諸相

すでに見たように、この物語は母を若くして亡くしたある父子家庭の生活情景が長男の視

点から1人称単数により語られるという形式をとっている。包帯製造業者としてカマルグ地方の Saintes-Maries-de-la-Mer に住みついた父は、「偉大な学者」grand savant と言われているが、彼の関心事は完璧な義足の発明である。したがって学者というより医療技師と言ったほうがより適切であろうが、そこには語り手の皮肉が込められていることが了解されよう。包帯も義足も負傷者の治療に使うものであるが、実はそこには戦争への風刺がなされているのである。なぜなら、父の生業は戦争による傷痍軍人のおかげで儲かる商売だからである。彼が財をなしたのもフランス人のドイツに対する報復の念のおかげなのである。だから父は「食事のたびにストラスブールの鐘楼に捕獲されてしまったコウノトリの受難」¹⁶⁾のことを話題にするのである。ここに普仏戦争の敗北に対するフランス人の復讐心を読み取るべきであろう。と同時に戦争によって繁盛する彼の商売への皮肉も。このような父への皮肉な眼差しは物語を通じて一貫して見られる。なかでも辛辣なのは、わが子をも自分の発明品の装着者となることを夢見ていることである。彼は息子たちを見て次のように思い描く。

あふれんばかりの愛情をもって、まず僕を眺めそれから弟たちを眺めながら、父は将来僕たちのうちだれが胸に勇者の勲章を、そしてズボンの下に父の作った芸術品ともいえる精巧な機械仕掛けの義足を付ける幸運を手にするかを思い描いていた¹⁷⁾。

このように父はわが子の負傷を痛むどころか、祖国のために出兵し名誉の勲章と同時に負傷して帰還する姿を期待しているのである。もちろん自らの発明品である義足を装着させることを願って。

こうした利己的で悪魔的な父親の行状は物語の冒頭からすでに風刺的となっている。彼は「尊敬の念を起こさせるくらいの正確さで毎日を送っている」と語られているが、それは「毎朝決まって左手を蚊に刺され、夜にはその刺されたあとの水膨れを日本の爪楊枝で突き刺して汁を飛び散らす」からであると説明される¹⁸⁾。まるで喜劇映画の一場面を見るかのような滑稽な情景である。それにもかかわらずその父の行為の正確無比さが尊敬に値すると言われているところに皮肉が込められていると言えよう。彼はその行為を子供たちに笑われると、偶然にまかせてその中の一人に平手打ちをくらわせてから、泣きながら逃げ出して台所兼実験室に閉じこもり自らの研究に没頭する。また、食後に酩酊するとナプキンを経帷子のように引きずり落としてテーブルの下に倒れこんでしまう。寡夫である父の女性関係についてはいっさい触れられてはいないものの、ある日、彼が梅毒に罹ったことが知られる。猥らな女性関係の暗示をそこに読み取るべきであろう。この作品における言葉遊びに関しては後で詳しく分析するつもりであるが、この父の罹病についても言葉遊びによる滑稽味の付加が風刺をよりいっそう辛辣なものとしていられるので、少し先取りしてプレヴェール独特の言語遊戯を見てみることにしよう。以下に原文を引用する。

Un jour mon père reçut la Roséole de la légion d'honneur et perdit beaucoup de cheveux, il bégaya aussi un peu et prit l'habitude de parler tout seul...¹⁹⁾

(下線による強調は執筆者による。)

下線部の“Roséole”とは梅毒などで見られる「バラ疹」のことであるが、プレヴェールはこの単語に「レジオン・ドヌール勲章」を結びつけている。ここでもじられているのはまずはレジオン・ドヌール4等勲章の“rosette”であろう。しかしその音韻的類似から「後輪」、「栄誉」を表すもう一つの“auréole”という単語も下敷きにされているのではなかろうか。なぜなら、父はこの病気のため多くの髪の毛を失うのだから。こうした重層的なシニフィアンの戯れによる観念連合は、プレヴェールにあってはよく用いられる手法の一つである。滑稽な内容を単に述べるに止まらず、それをさらになんらかの言語遊戯を用いて滑稽味を倍加させるのがプレヴェールならではの特徴ではなかろうか。

バラ疹発症後に精神の異常をきたし始めた父が出奔する場面や、放浪を終えて帰還する場面などは、まるで喜劇映画を見るようである。子供たちの教育係を解任して司祭を追い出した後で、父親はズボンを脱ぎそれを丹念に折りたたんでから小脇にかかえて大声で恐ろしい歌を歌いながら庭に下りていく。その歌は「農民のクレド」に呪文のようなものを混ぜ合わせた歌であり、子供たちを恐怖に陥れるのである。また、置手紙の署名にはいつもの“Jean-Benoît”という名ではなく、それまで聞いたことのない“Ludovic”という名前が書かれており、これも子供たちを驚かせる。

とりわけ父親が帰還する場面の描写は、あたかもドタバタ喜劇の一場面を彷彿とさせる。見張りに立たせていたロバがある朝かぶらされていたイートンキャップを振りながら鳴き声をあげて町中の人を目覚めさせると、ギャロップで土埃の雲めがけて突進したあと、背中にその土埃の雲を乗せて戻ってくる。スポーツマンの弟エルネストがそれをストップウォッチで計測して57秒かかったと語られる。ロバに運ばれてきたその土埃の雲の正体は、古めかしいスポーツウエアーにメキシコのソンプレロをかぶった父親であることが判明する。久し振りに再会した子供たちを見て1人足りないのに気づいた父は「頬につたわった一粒の涙をカメムシをつぶすようにひそかに握りつぶす」のである。それから末っ子の弟を腕に抱いてはげしく尻たたきをする、泣きわめく弟のことなど意に介さずにいきなり次のように叫ぶのである。「3週間なにも食べていない。昼食の準備はできているのか？」こうした利己的で我儘な父親の帰還については、聖書の一節をもじって「放蕩パパ」papa prodigueと皮肉られている²⁰⁾。

母親不在のこの家には年老いた女中のマリー・ローズが食事の世話をするために雇われているが、このマリー・ローズもまた風刺の対象となっている。ある意味でこの女中は父親と一心同体のような存在とも言えよう。なぜなら父親の出奔後いなくなったかと思えば、父親の帰還と同時に再び姿を現すからである。彼女の作る料理がどのようなものであるかは、物語のはじめに描写される台所の調理場の様子を見れば一目瞭然であろう。まずは父親の実験室を兼ねている台所の描写から見てみよう。

豚の脂身とヘルニアバンドが食卓の上に散らかり、ブランデー漬けのサクランボの入ったビンの隣にはアルコール漬けにされたサナダムシのビンや胎児のビンが複数置かれていた。²¹⁾

このような「脂身」と「ヘルニアバンド」、あるいは「サクランボ」と「サナダムシ」とい

ったかけ離れた語の結合は、ブルトンらシュールレアリストたちが引き合いに出したロートレアモンの「手術台の上でのこうもり傘とミシンの出会い」(『マルドロールの歌』)を彷彿とさせないでもない。プレヴェールはシュールレアリズム運動に一時加わっていたことが知られているが、その運動から影響を受けたことは確かであるが、言葉遊びやブラックユーモアやナンセンスの感覚などは元来詩人に備わっていた資質でもある。シュールレアリストたちが好んだ「たえなる屍」cadavre exquis という紙切れ遊びにしても²²⁾、アラン・ルステンホルツによれば最初に考案したのはプレヴェールであったという。あるときシュールレアリストたちが集って紙切れ遊びをしていたとき、プレヴェールがその紙きれにどんな単語でもいいから思いついた語を書きとめるよう提案し、先陣を切って「たえなる屍」le cadavre exquis という主語を書き、それを折りたたんでだれかほかの一人に手渡すと、その人が「飲むだろう」boira という動詞を書き、まったく同じようにまた別のだれかに折り曲げて渡すと、今度はその人が「新らしいワイン」le vin nouveau という目的語を思いつくままに書いたのである。その場に居合わせたアンドレ・ブルトンはずき喜びの叫びをあげ、「これは異なるいくつかの精神の出会いの客観的な偶然を、自動書記法よりもっとよく表している遊びだ。これからもたびたびこの紙切れ遊びをしようじゃないか、文だけでなくデッサンでも同じことをやろう」と述べたという²³⁾。プレヴェールのユーモアのセンスと言葉に対する自由な発想法をよく表しているエピソードではなかろうか。

さて、本論の台所の描写に戻ると、このようなかけ離れた語の結合は、物語の結構から自然と導き出されたものであることが分かる。台所兼実験室という設定自体が、思いがけない単語の組み合わせを生み出し、戯画化された父親と女中との奇妙でちぐはぐな精神状態を具象化してみせているのである。そこに支配的なのは不潔さと病氣と死のイメージにはかなならない。「ヘルニアバンド」、「サナダムシ」、あるいは「胎児」の標本がこの台所の陰気で不潔なメタファーとなっているのである。女中の調理の場面と食事の様子は滑稽なイメージの連続であり、それを可能にしているのも、実験室兼台所という設定を巧みに利用したプレヴェールの仕掛けにはかなならない。以下に引用する場面はあたかも喜劇の一場面を見るかのようである。

放心状態の年老いた女中はときどきチーズカバーと排気ポンプを混同し、吸い取り器で無邪気に栗のピューレを押し出し、どうにかこうにか食事の準備が整うと、父はラッパを吹きならし、一同は食卓につくのであった。

ハエやこの土地のありとあらゆる這いまわる虫たちがテーブルクロスの上に蠢いており、ゴキブリがお互い挨拶を交わしながらパンの中から出てきて、皿の下に身を隠し、スープの中に飛び込み、ぼくたちの歯の下でカリカリという音をたてるのであった。²⁴⁾

このように女中の作る料理はお世辞にも美味しそうな料理とはいえない。上の空で調理する彼女は調理器具の代わりに実験器具を間違えて使ったりする。また食卓の不潔さは際立っており、ゴキブリなどの虫がテーブルクロス上を這いまわっており、ときどきスープの中に落ちたゴキブリを誤って食べてしまったりもするのである。また父親の吹くラッパに戦争や軍隊の暗示をみることはそれほど困難なことではない。この食事の合図のラッパは、父親が放

浪の末帰還したときの食事のときも相変わらず吹きならされることとなるであろう。

マリー・ローズはこのように子供たちに食事を作って与える乳母のような存在であるが、父親同様、残酷で悪魔的な側面も併せ持っている。なぜなら、彼女は動物を絞め殺す奇癖の持ち主だからである。それゆえ彼女は「人食い鬼」ogresse というあだ名で呼ばれているのである。しかし、ロバには反対に噛みつかれて逆襲されてしまう。なんとも滑稽な姿である。ここに暗示されているのは、理不尽な暴力に対する無垢な動物側からの反逆であり、有無をいわず自分たちの命令に従わせようとする権柄づくの大人に対する子供たちの反抗心と同質のものである。

この人間の利己的で一方的な暴力に対する動物側の防御策をユーモラスに描いているのが雄牛のレースの話である。父親がいなくなったあと、退屈な毎日を送る子供たちの唯一の気晴らしは町で行われる雄牛のレースである。その雄牛競争の中で語り手とエチエネットというエーグ・モルトの動物解体屋の娘との出会いが語られるが、彼女の家で飼っている Hector という雄牛は、レースで優勝しないために、わざと転ぶのだということを彼女から聞かされる。その理由は、そのレースで優勝した雄牛 taureau は去勢されてしまい去勢牛 bœuf にされてしまうからである。Hector は悪知恵をきかしてその難を逃れているのである。このギリシャ神話の英雄の名前を付けられた雄牛も、マリー・ローズに噛みついて逆襲したロバ同様、子供たちの反抗心を共有する存在なのである。

しかし語り手の風刺の矛先が最も向けられるのは教育係をつとめる司祭にである。まずはその肖像から見てみることにしよう。

司祭は僧衣に身をつつみ、活力のない目と平べったく青白い長い腕をしていた。その腕が動くと、流し台の石の上で死んでいく魚を彷彿とさせた。²⁵⁾

まるで看守が牢の鍵を触りまくるように神聖な護符をいじくりまわし、目を伏せながら話をする司祭は、すでにだいぶ前からぼくたちの印象に残らない人物と化していた。ぼくたちは彼のことを父が「家族の思い出」les souvenirs de famille とおおげさに呼んでいた家に置かれているいくつかの品物のひとつのようにいくぶん見なしていた。²⁶⁾

エチエネットにも「去勢牛」bœuf と呼ばれることになるこの司祭は、目に生気がなく、死んだ魚のような腕をしており、生きた人間ではなくまるで物のような非人間的な存在として見られている。この司祭もまたマリー・ローズがロバに噛みつかれたように、子供たちによる聖書のパロディーが原因で諍いが生じたときに、語り手から尻を噛みつかれるのである。父親から一度追放されたあと、再び舞い戻ってきたときの司祭は、「剃髪の部分に勇ましく警帽をかぶり」、露骨な復讐心をさらけ出して好戦的で扇動的な言辞を弄する。まるでその司祭の好戦的な演説が呼び水になったかのように、物語の最後は戦争の勃発が語られて閉じるのである。

このように嘲弄的となる司祭の伝統的な詰め込み教育の弊害を表現するのに、プレヴェールは語り手にフランスの歴史上の人物や事件や文学作品や聖書からの引用を列挙させて揶揄するという方法をとっている。プレヴェールにあっては、前述したように、風刺は内容の

みならずシニフィアンの戯れや常套句のもじりなどの言葉遊びも同時に駆使されつつ展開されるという特徴がある。以下に司祭に詰め込まれたとおぼしき知識の数々を見てみることにしよう。

引用ともじり

司祭の厳しい監視のもと詰め込み教育と宗教教育を強要される子供たちの抑圧された味気ない日常を表現するのに、プレヴェールは名詞の列挙を用いてその単調さを際立たせようとしている。

日々はつぎつぎと列をなし、月曜が火曜を押し、火曜が水曜を押し、こうして季節が廻っていった。

季節、風、海、木々、鳥たち。歌う鳥、渡っていく鳥、殺される鳥、詩の中で羽をむしられ、はらわたを取られ、焼いて食べられる鳥、あるいは納屋の戸の上に釘でとめられる鳥。²⁷⁾

ここで着目したいのは鳥のイマージュである。プレヴェールにおける「鳥」は自由の象徴であることは大方の指摘しているところであるが、有名なシャンソン「ひばり」alouetteを下敷きにした上の引用の最後の部分で、殺されて食べられし鳥と納屋の戸の上に釘うたれる鳥は、自由を奪われ司祭の監視のもとに置かれた子供たちのメタファーになっているのではなかろうか。本来ならば自由に空を飛ぶ鳥のイマージュが前半部分で描かれているとすれば、後半部分是对照的に人間に撃ち落とされて食べられてしまいか、釘でとめられてしまう哀れな鳥の末路が示されているのである。わが身の境遇になぞらえたこの哀れな鳥のイマージュのあとで、いよいよ司祭に詰め込まれた知識がいくつかの断片的引用をとおして窺えるであろう。そのうちのいくつかを見てみることにしよう。文字や音節の置き換えにより滑稽な効果を狙った語音転換 contrepétie などを用いられている部分もあるし、故意に引用したテキストがもじられている部分も見うけられるので、以下原文にあたりながら検討していきたい。

La viande aussi, le pain, l'abbé, la messe, mes frères, les légumes, les fruits, un malade, le docteur, l'abbé, un mort, l'abbé, la messe des morts, les feuilles vivantes, Jésus-Christ tombe pour la première fois, le Roi Soleil, le pélican lassé, [一部省略] le Petit Chose, notre bon ange, Blanche de Castille, le petit tambour Bara, le Fruit de nos entrailles, l'abbé, [一部省略] la retraite de Russie, Clanche de Bastille, [一部省略] l'arthrite de Russie, les mains sur la table, J.-C. tombe pour la nième fois, il ouvre un large bec et laisse tomber le fromage pour réparer des ans l'irréparable outrage, le nez de Cléopâtre dans la vessie de Cromwell et voilà la face du monde changée, ainsi on grandissait, on allait à la messe, on s'instruisait et quelquefois on jouait avec l'âne dans le jardin.²⁸⁾

(下線による強調は執筆者。)

このようにこの部分は、プレヴェール独特の言葉のコラージュにより、日常生活の点描やフランスの過去の文学作品の引用や暗示で構成された一見脈絡を欠いたテキストの寄せ集めのように思える。ただ全体の傾向として指摘しうるのは、17世紀古典主義時代の文学からの引用が多いということであろう。もちろん19世紀文学への目配せもなされているが。そして歴史や文学の典拠に交じって司祭 *abbé* やキリストへの言及が度々なされているように、古典教育のほかに宗教教育も重要な日課となっていることが窺えよう。では順を追って上の引用箇所の出典を確認しておきたい。まずカトリック教徒の日課の様子が司祭のミサを中心に点描されたあと、キリストの十字架への道行の苦難が語られ、「太陽王」が引用されたあとの「疲れたペリカン」「*le pélican lassé*」は何を暗示しているのであろうか。これは詩人とミューズとの対話からなるミュッセの「5月の夜」で言及されているペリカンのことではなからうか。「自らの血で子を養う慈しみのペリカン」の伝承はよく知られており、ミュッセはそのペリカンの姿に内に秘めた苦悩を読者にさらけ出す詩人を重ね合わせてミューズにすぎのように歌わせている。

Lorsque le pélican, lassé d'un long voyage,
 Dans les brouillards du soir retourne à ses roseaux,
 Ses petits affamés courent sur le rivage
 En le voyant au loin s'abattre sur les eaux.²⁹⁾

(下線による強調は執筆者。)

このように同じ表現が用いられていることから判断して、プレヴェールはこのミュッセの詩句を引用している可能性が高いと言えるであろう。

“*le Petit Chose*” はドーデが復習教師時代のあだ名である「ちび助」を題にして青春の回想を書いた最初の長編『プチ・ショーズ』*le Petit Chose* (1868年) のことである。

“*notre bon ange*” はこの物語の中で司祭が子供たちを諭すときにいつも使っている言葉であることは、司祭との間に諍いが生じたときの弟エドモンのつぎのような台詞から窺うことができる。

Assez, l'abbé, assez. Gardez pour vous vos stupides histoires d'anges gardes-chiourme qui rôdent la nuit dans les chambres, allez faire vos dragonnades ailleurs et sachez qu'à partir d'aujourd'hui, dans cette maison, ce ne seront plus les coccinelles mais les punaises qui porteront le nom de bêtes à bon Dieu.³⁰⁾ (下線による強調は執筆者)

物語の題名に使われている「看守天使」“*anges gardes-chiourme*” という言葉がエドモンの台詞の中に出てくことに注意しよう。この“*gardes-chiourme*” というのは、もともとはガレー船や徒刑場の看守を指していた言葉で、そこから派生して「厳しい容赦のない監視人」という意味で使われるようになった単語である。また上の引用文にある“*dragonnades*” という単語は、ルイ14世治世下に竜騎兵を中央山塊のセヴェンヌ地方に駐屯させて行った新教徒迫害(1684-85)のことである。こうしたエドモンの怒りの爆発を見ると、司

祭の宗教教育が普段からどれほど厳しいものであったかが窺われよう。また引用の最後の部分ではすでに何度か指摘したように、プレヴェール好みの言葉遊びが見られる。フランス語で「テントウムシ」“coccinelle”のことを“bête à bon Dieu”ということにひっかけたもじりである。また「テントウムシ」の代わりに「神様の虫」の称号を得たのが「カメムシ」“punaise”であるところが辛辣な風刺となっていることにも着目しよう。“punaise”には俗語で「卑劣漢」という意味もあるからである。プレヴェールは当然この単語を二重の意味を持たせて使っているものと思われる。

さて再び最初の引用の続きの部分に戻ろう。“Blanche de Castille” (1188-1252) はルイ 8 世の王妃で、聖王ルイ 9 世の母である。彼女はルイ 9 世の摂政となり国内諸侯の反乱を鎮圧し、南仏の支配を強化したことで知られている。ところで、物語の中では、雄牛のレースのときに出会った娘エチエネットの住む町が Aigues-Mortes に設定されているが、この町は聖王ルイ 9 世ゆかりの町でもある。彼がパレスチナへ向けて十字軍を出征させるために建設したのがこの町であった。なぜなら 13 世紀にはフランス王は地中海沿岸に自国の港をまだ所有していなかったからである。マルセイユはまだフランス王所領の港ではなかったのである。ルイ 9 世は外国人の港から十字軍を出征させることを嫌い、はじめて地中海沿岸に船を出港させることのできる自国の港を造らせたのがこの Aigues-Mortes だったのである。司祭が子供たちに“Blanche de Castille”の名前を教えたのは、もしかするとこの聖王ルイ 9 世の Aigues-Mortes からの十字軍出征に結び付けてのことであったかもしれない。因みにルイ 9 世の十字軍出征は、1248 年と 1270 年に 2 回行われている。不幸にも 2 回目の出征のときには、彼はチュニスでペストに罹って客死することになる。この町は 14 世紀までは港として繁栄したものの、海まで通じていた運河が砂の堆積により使えなくなり、その後は港としての機能を果たせなくなり、徐々に衰退していったのである。町の名前はそれに由来し、「死んだ水」の意味である。この町の名が語り手に恐怖心を起こさせ、エチエネットに会いに行くことを躊躇せしめたのである。

閑話休題。ここでプレヴェールの言葉遊びについて見ておこう。すぐ下の“Clanche de Bastille”は“Blanche de Castille”から子音の語音転換 contreapétie によって作られた表現であるが、“Clanche”という語はフランス語にないプレヴェールの造語である。しかしこれにはジャッキー・シャレルが指摘しているように、同音の語で「扉の掛金’clenche’”という単語があり、二重の言葉遊びが隠されている可能性もある³¹⁾。いずれにせよ、ここにはフランス革命への暗示があることは確かであろう。というのも、“Blanche de Castille”のつぎに出てくる「バラの小さな太鼓’le petit tambour de Bara’”は、ヴァンデの乱で鼓手として共和国軍に加わり勇壮な死を遂げた少年兵のことだからである。

「ロシアからの撤退’la retraite de Russie’”と「ロシアの関節炎’l’arthrite de Russie’”の間にも両者の語音の類似による地口が見られる。前者にはもちろんナポレオン軍のロシアからの敗走が含意されていることは言うまでもない。

後半部分の文は、ラ・フォンテーヌとラシーヌとパスカルからの断片的引用を結合して構成されたまさに言葉のコラージュである。ラ・フォンテーヌとラシーヌの詩句の引用は、一部単語の置き換えは見られるものの、ほぼ原文通りの引用がなされている。“il ouvre un large bec et laisse tomber le fromage”「彼(＝カラス)は大きくちばしを開け、チーズ

を落としてしまった」はよく知られたラ・フォンテーヌの「カラスとキツネ」の末尾の詩句からの引用である。原詩は“*Il ouvre un large bec, laisse tomber sa proie*”となっており³²⁾、最後の単語が“*sa proie*”から原詩の意味内容をくみ取った“*le fromage*”に置き換えられているのと、接続詞の“*et*”が付加されている以外は同じである。

上記のラ・フォンテーヌの詩句の状況補語の位置に置かれている“*pour réparer des ans l'irréparable outrage*”「取り返しのつかない時の暴力（＝老醜）を繕うために」はラシーヌの『アタリー』からの引用である³³⁾。このように動物を主人公としたラ・フォンテーヌの寓話詩と、子孫を皆殺しにしたユダヤの女王の破滅を描いたラシーヌの悲劇『アタリー』の荘重な詩句とが結びつけられることにより、厳密なジャンル分けが遵守されていた古典主義文学への滑稽で風刺的效果が醸成されることになる。また『アタリー』は、信心深いマントノン夫人が王女の学ぶサン＝シール校の女生徒のために恋愛拔きの劇として筆を折っていたラシーヌに依頼して書かせた宗教悲劇であり、司祭の宗教教育にとっておそらく格好の教材であったに違いない。

最後に引用されているのはパスカルの『パンセ』である。それも「クロムウェルの膀胱の中のクレオパトラの鼻」“*le nez de Cléopâtre dans le vessie de Cromwell*”と表現されているように、『パンセ』の中の別々の断章からとられた美醜異質な表現が強引に結び付けられており³⁴⁾、プレヴェールのパスカルに対する辛辣な風刺が窺える。単語も「尿管」“*uretère*”から「(動物の)膀胱」“*vessie*”に置き換えられている。パスカルは『言葉』の中の別の詩においても風刺の的となっており、「キリスト教護教論」として構想された『パンセ』に対するプレヴェールの揶揄が見てとれる。例えばフランス語の“*Pensée*”という語のもつ二つの意味、すなわち「思想」と「パンジー」とをかけることによって、暗にパスカルの『パンセ』批判となっている「花と冠」《*Fleurs et couronnes*》³⁵⁾や、パスカルの「賭けによる論証」を皮肉った「ブレーズ・パスカルとかいうやつ、等々」という断片詩「愚かな賭」《*Les paris stupides*》³⁶⁾などを挙げることができる。物語においては、このような『パンセ』のパロディーには厳しい監視のもとで司祭から古典教育と宗教教育を強いられている子供たちの反逆精神を読み取ることもできるであろう。上で見たラシーヌの『アタリー』同様、この『パンセ』も司祭の宗教教育にはうってつけの教材であったと思われる。この子供たちの司祭への反抗心は、つぎに見るように聖書の物語の改作やコラージュやパロディーという形で表出してくることになるであろう。

『聖書』のパロディー化

すでに何度も指摘したように、この作品においてはあらゆる権威主義が風刺的となっている。とりわけキリスト教への風刺は辛辣を極める。語り手を含めて子供たちが司祭から繰り返し聞かされる『聖書』は、ここでは徹底的に改作され、パロディー化されている。以下それがどのように行われているかを、いくつかの例を取り上げながら見ていくことにしよう。まず司祭が子供たちに読み聞かせる『聖書』のイエス・キリストはつぎのように要約されている。

彼（司祭）は僕たちに昔のある一人の男のいつも同じ平凡で悲しい物語を読み聞かせた。あごに山羊ひげをはやし、肩に子羊をのせ、夜にある庭の中で自分自身のことを嘆き悲しんだあと、2枚の救いの板に釘付けにされて死んだ男の話を。それはいつも自分の父親の話をするある家族の息子であった。[中略] 彼は自分の話を感心して聞いてくれる不幸な人々に物語った。なぜなら彼は話じょうずであったし、教養もあったからである。³⁷⁾

このように最初からキリストの神性は否定されており、ごく普通の人間として提示されているにすぎない。彼の話が不幸な人々の関心をよんだのも、単に教養があり話術に長けていたからだと皮肉られている。このあと『聖書』で語られるキリストの数々の奇跡はことごとく茶化されることになる。以下原文を引用しながらパロディー化の諸相を分析していきたい。

Il dégoitrait les goitreux et, lorsque les orages touchaient à leur fin, il étendait la main et la tempête s'apaisait.³⁸⁾

『聖書』では多くの病気がキリストの奇跡によって治癒されるが、ここに出てくる「甲状腺腫」“goitreux”なる病名は『聖書』には見あたらない。これはプレヴェールの言葉遊びから選び出された病名ではなかろうか。『マタイによる福音書』(21.12-17)でキリストが商人たちを寺院から追い出す話の中で、「足の悪い人」“boiteux”をキリストが治す場面が語られている。この“boiteux”から“goitreux”という単語が語音転換により導き出されたように思われるのである。また「嵐が終りにさしかかったところに、彼が手をひろげると、その嵐は静まった」という後半部分は、嵐がキリストにより静められた奇跡のパロディーであることは明白である³⁹⁾。

上の引用の続きを見てみよう。

Il guérissait aussi les hydropiques, il leur marchait sur le ventre en disant qu'il marchait sur l'eau, et l'eau qui leur sortait du ventre il la changeait en vin; à ceux qui voulaient bien en boire il disait que c'était son sang.

この「浮腫性疾患」“hydropiques”という病名も『聖書』に出てこない単語である。これはキリストが湖の上を歩くという奇跡を痛烈に風刺するために選ばれた病名であることは言うまでもない⁴⁰⁾。ここではキリストは湖の上を歩くのではなく、「浮腫性患者」の腹の上を歩きながら自分は水の上を歩いているのだとうそぶいているのである。ここではキリストは詐欺師以外の何者でもないと言わんばかりである。さらには、『聖書』の異なる場面が「水」と「赤ワイン」と「血」という液体のイメージ連鎖によりコラージュのように結合されることで、『聖書』の物語がまったく新しい筋の話に改作されてしまっている。後半部分だけを読めばそこにはそれほど辛辣な風刺がなされているようには思えないが、滑稽な小噺のような前半部分があるために、読者はそこにもなんらかの欺瞞が隠されているのではないかと疑わざるをえなくなってしまうのである。最後にもう一例取り上げて、これまでの考察と合わせてプレヴェールの風刺法についてその特徴を検討してみたい。

En attendant, il leur multipliait les pains, et les malheureux passaient devant les boucheries en frottant seulement la mie contre la croûte, ils oubliaient peu à peu le goût de la viande, le nom des coquillages et n'osaient plus faire l'amour.

(下線による強調は執筆者。)

最初の「彼（キリスト）は不幸な人々にパンを増やした」という箇所は、『聖書』の「キリストは5千人の人に食べ物を与えた」⁴¹⁾、あるいは「キリストは4千人の人に食べ物を与えた」⁴²⁾という部分を踏まえているが、そのあとの部分はプレヴェールの創作である。『聖書』の記述によると、キリストが5個のパンと2匹の魚を5千の民衆と使徒たちが食べるに十分な量に増やした奇跡が物語られているが（『マタイによる福音書』等）、プレヴェールはそれをパンだけに限定して、それを不幸な人々に与えたとしている。その結果、「不幸な人々は、パンを食べるだけで我慢しながら、肉屋の前を通り、徐々に肉の味や貝の名前を忘れていき、愛の行為（セックス）も敢えてしなくなってしまう」と結論付けるのである。つまり、キリストの善意の奇跡がここでは不幸な民衆を逆に無気力と不能に陥れてしまうという欺瞞が風刺されているのである。上で見た去勢される雄牛のように。このようにここでは『聖書』の記述に対するかなり辛辣なパロディーが見られるが、プレヴェールの風刺の仕方は内容だけに限定されない。『聖書』の滑稽化は、言語遊戯によってもさらに増幅されている。下線部の文は、“*frotter la croûte contre la mie*”「食事にパンを食べるだけで我慢する」という慣用句を語順転換により意識的に組み替えた表現となっている。これは、注目させたい部分の意味内容をさらに強調するという効果を生み出すためにプレヴェールが好んで使う手法である。これにより読者の注意は当然その部分に引きつけられることになるからである。

これと同じ手法による言葉遊びはほかの箇所でも見られる。父親が司祭を家から追放する場面で、“vous n'avez pas réussi, comme c'était convenu, à faire prendre à ces enfants le messie pour une lanterne”⁴³⁾という台詞がある。これは“prendre des vessies pour des lanterns”「とんだ間違いをする（豚の膀胱から作った風船玉をちょうちんと間違えるという意味に由来）」という熟語をもじったものである。プレヴェールは語頭の“v”を“m”に置き換えることでこのような茶化した表現に作り変えているのである。プレヴェールの作り変えた表現では“messie”「救世主（キリスト）」を「ちょうちん」と取り違えることになるが、この熟語を知っているフランス人であれば、その裏に当然「豚の膀胱」“vessies”を読み取るに違いない。プレヴェールの言葉遊びのねらいもまさにそこにあると言えよう。こうして内容的な風刺のみではなく、言語遊戯を効果的に用いることで、キリストは二重にパロディー化されることになるのである。このようにプレヴェールの言葉遊びにあっては、単語の子音や母音の置換、転換、組み換えあるいはアソナンスやアリテラシオン等が好んで用いられていることが分かる。

またプレヴェールのあらゆる社会通念や既成の価値観に対する異議申し立ては、フランス語の使用においては慣用句へのものじりという形で表現されることが多い。例えば、帰還した父親の支離滅裂な冒険譚の一節においても、“*petit ticket de quai*”「小さな駅の入場券」といったようなシニフィアンの戯れや、“*un chameau dans la gorge*”「のどの中のラクダ」（“avoir un chat dans la gorge”「声がしゃがれる」という慣用句の中の“chat”を語頭の音

が一致する“chameau”に入れ替えたもじり表現⁴⁴⁾といったような慣用句の解体表現が散見されるのである。

以上見てきたように、『家族の思い出』は、父権であれ宗教であれ、権威主義をふりかざし既成の道徳や価値観を押し付けようとする大人たちの抑圧に対する子供側からの反逆を、皮肉やパロディーを武器にして、文学的テキストのコラージュや慣用句のもじりやシニフィアンの戯れを随所にちりばめながらよりいっそう辛辣なスパイスをきかせて紡ぎ出した、プレヴェールの初期の風刺的テキストの傑作であるように思われる。ここにはすでにプレヴェールならではの常套句に対する不断の問い直しと組み換え作業が見られると同時に、古典文学であれ、聖書であれ、慣用句であれ、権威ある固定化されたテキストをもパロディー化しようとする徹底的な風刺精神が読み取れよう。このようなテキストに接した読者は、社会通念の問い直しに導かれ、普段なにげなく使っている日常言語であったとしても、その意味や用法の再検討へと誘われるのではなかろうか。その意味では、プレヴェールのテキストは読者に対して不断の問いかけを促しているテキストであると言える。

むすび

プレヴェールといえば、日本においてもその名をどこかで耳にした人は多いであろう。彼の名は人によって異なるジャンルの作品に結びついているのではなかろうか。映画ファンなら彼がそのシナリオを手掛けたマルセル・カルネ監督の『天井桟敷の人々』を真っ先に思い出すかもしれない。文学好きであればフランスにおいて多くの一般読者を獲得した『言葉』を想起するであろう。あるいはシャンソン「枯葉」の作詞者として彼の名を記憶に留めている人もいるかもしれない。いずれにせよ、プレヴェールはわが国においてもその名が比較的良好に知られているフランス作家の一人であることは間違いなかろう。

しかしこれらよく知られた作品はいずれも1945年から1947年にかけて発表されたものであり、それだけを拠り所とするならかなり限定されたプレヴェール像しか見ていないことになる。実際大方の日本人にとってのプレヴェール像は、主にこれらの作品を通して形成されたものではなかろうか。確かにこれまでプレヴェールの紹介や翻訳は部分的にはなされてはきたが、その全体像となるとまだあまり詳しく知られていないというのが実情であろう。

本稿では、『言葉』の中で最も初期に書かれた『家族の思い出、あるいは看守天使』を取り上げ、主に風刺と言葉遊びの観点からプレヴェールの初期作品における特徴の一旦を明らかにし得たのではないかと考えている。しかし、シュールレアリスムとの関係や10月グループ内での創作活動、あるいは映画のシナリオ制作等、プレヴェールの初期創作活動についてはまだその全容があまり明らかになっていない。プレイヤッド版『プレヴェール全集』の改訂版が刊行されたことや、客観的事実に基づく詳細な『伝記』も出版されたことで、本格的なプレヴェール研究の基礎は整いつつある。あとは日本においてもそれら最新の研究成果に基づいて、プレヴェール研究を推し進めていく研究者の登場が待たれるところである。本稿がそのきっかけとなれば幸いである。

注

- 1) Jacques Prévert, *Œuvres Complètes I*, Edition présentée, établie et annotée par Danièle GASIGLIA-LASTER et Arnaud LASTER, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 2006, “Introduction”参照。なお、プレヴェールのプレイヤッド版の初版の刊行は、第1巻が1992年、第2巻が1996年であるが、改訂版の出版は第1巻が2006年、第2巻が2004年となっている。
本稿では、プレヴェールのテキストの引用は上記の版に拠る。(以下 Prévert, *Œ. C. I* と略記。)
- 2) Prévert, *Œ. C. I*, pp. 16-26.
- 3) 1948年8月12日付 Maurice Saillet 宛書簡。Prévert, *Œ. C. I*, p.1010.参照。
- 4) Prévert, *Œ. C. I*, p.1022.参照。
- 5) Prévert, *Œ. C. I*, p.1022.参照。《30 ans. Ecrit, dit-il, en mauvais français pour les mauvais français.》
- 6) Jacques Prévert, *Œuvres Complètes II*, Edition présentée, établie et annotée par Danièle GASIGLIA-LASTER et Arnaud LASTER, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 2004, in *Choses et autres*, pp.215-253. (以下 Prévert, *Œ. C. II* と略記。)
- 7) Prévert, *Œ. C. II*, p.225.参照。
- 8) Prévert, *Œ. C. I*, p.1022.参照。
- 9) Prévert, *Œ. C. II*, p.251.参照。Sitting Bull (1834-1890) はダコタのスー族の酋長で、白人に対して激しく抵抗した実在のインディアンの英雄である。彼を主人公にした物語『シッティン・グ・ブル、最後のスー族』*Sitting Bull, le dernier des Sioux* は1908年3月5日から雑誌 *La Nouvelle populaire* に掲載されはじめ、合計50回にわたって連載され続けた。『幼年期』の中でプレヴェールは、小学校の前にあった書店でその雑誌をはじめインディアンを描いたいくつかの本を見つけ愛読していたことを明かしている。
- 10) Prévert, *Œ. C. II*, p.251.参照。
- 11) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.
- 12) Prévert, *Œ. C. II*, pp.220-221.
- 13) Marcel Duhamel: *Raconte pas ta vie*, Paris, Mercure de France, 1972.
- 14) Prévert, *Œ. C. I*, p.43.
- 15) Prévert, *Œ. C. I*, pp.100-102.
- 16) Prévert, *Œ. C. I*, p.17.
- 17) Prévert, *Œ. C. I*, p.17.
- 18) Prévert, *Œ. C. I*, pp.16-17.
- 19) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.
- 20) 『ルカによる福音書』15: 11-32の “enfant [fils] prodigue” のもじり。
- 21) Prévert, *Œ. C. I*, p.17.
- 22) シュールレアリストたちが紙切れ遊びに与えた名称で、1枚の紙に数人の書き手が他人が先に書いた語を見ることなしに次々に文の要素を書き足していく一種の天狗俳諧のような言葉遊びである。
- 23) Alain RUSTENHOLZ, *Prévert inventaire*, Editions du Seuil, 1993, pp.65-66.
- 24) Prévert, *Œ. C. I*, p.17.
- 25) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.

- 26) Prévert, *Œ. C. I*, p.20.
- 27) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.
- 28) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.
- 29) Musset, *《La Nuit de Mai》*, *Poésies Complètes*, Edition établie et annotée par Maurice ALLEM, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 1993, p.308.
- 30) Prévert, *Œ. C. I*, p.20.
- 31) Jacky CHAREYRE, *Les Formes du comique dans les poèmes de Jacques Prévert*, thèse de doctorat d'Université soutenue en 1984 à Grenoble.
- 32) La Fontaine, *《Le Corbeau et le Renard》*, Fables, I, II, *Œuvres Complètes*, “Bibliothèque de la Pléiade”, t. I, 1991, p.32.
- 33) Racine, *Athalie*, acte II. sc. V, v. 496, *Œuvres Complètes*, “Bibliothèque de la Pléiade”, t. I, 1990, p.893.
- 34) Pascal: *《Le nez de Cléopâtre: s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé》*, *《Cromwell allait ravager toute la chrétienté; la famille royale était perdue, et la sienne à jamais puissante, sans un grain de sable qui se mit dans son uretère》*, *Pensées*, Br. 162 et 176; L.G., 389 et 358, dans les éditions Brunschvicg et Le Guern, “Folio”, Gallimard, 1977.参照。
- 35) Prévert, *Œ. C. I*, pp.43-45.
- 36) Prévert, *Œ. C. I*, p.122.
- 37) Prévert, *Œ. C. I*, p.18.
- 38) Prévert, *Œ. C. I*, p.19. このあと同頁からの引用が続くので、注記は省略する。
- 39) 『マタイによる福音書』(8.23-27), 『マルコによる福音書』(4.35-41), 『ルカによる福音書』(8.22-25) 参照。
- 40) 『マタイによる福音書』(14.22-33), 『マルコによる福音書』(6.45-52), 『ヨハネによる福音書』(6.15-21) 参照。
- 41) 『マタイによる福音書』(14.13-21), 『マルコによる福音書』(6.30-44), 『ルカによる福音書』(9.10-17), 『ヨハネによる福音書』(6.1-14) 参照。
- 42) 『マタイによる福音書』(15.32-39), 『マルコによる福音書』(8.1-10) 参照。
- 43) Prévert, *Œ. C. I*, p.21.
- 44) Prévert, *Œ. C. I*, p.25.

(2007年11月20日受理)